



\*\*\*\*\*小田地区会館[地域の輪づくり講座]\*\*\*\*\*

子どもから、お年寄りまで、支える人や支えられる人のすべてが暮らしやすく、前向きに生活できる街。

私ども小田地区会館はそんな街づくりをお手伝いしたい…

そのために、皆様とともに学び考えていく場を一つでも多く作り、提供してまいります。

8月は、「今だからこそ、子どもたちに聞かせたい授業」を講座として公開いたします。

## HIROSHIMA・NAGASAKI

兵庫県被爆二世の会 会長  
伊丹市立伊丹高等学校 教員 関西学院大学 講師(非常勤)

畑井 克彦さん

公開講座・小学6年生向け出前授業

ひばく

# 「被爆(曝)することとは」

## FUKUSHIMA

1回目 平成24年8月11日(土) 午前10:00~12:00 午前9:30より受付

\*小学校高学年向けのお話となります。参観もしていただけます。

2回目 平成24年8月12日(日) 午後6:00~8:00 午後5:30より受付

\*こちらは主に親御様、教育関係の方がた向けです。お子様も参加していただけます。

尼崎市立小田地区会館 2F 大会議室

各定員 45名 参加費 無料

JR 尼崎駅より南へ400m、P 有り



●お申し込みはお電話で… 尼崎市立小田地区会館 尼崎市長洲本通1丁目15-38  
受付は午前9:00より午後8:30まで(水曜定休)

06-6488-2574

# 原爆語った母 疎んだ僕

見つめ  
なおす夏 4

子供のころは夏が嫌いだった。母のあの話を聞かなければならないからだ。

畑井克彦さん(56)の母茂子さんは、原爆投下直後の広島に負傷者救護のために動員された。当時まだ17歳の女学生。毎年8月6日が近づくと、惨状を事細かに語った。

次第に疎ましくなり、高校生のとき感情をぶつけてしまった。「もうええ。僕に何せえって言うねん」。母は黙り込み、それから多くを語らなくなった。

兵庫県伊丹市で教員になった畑井さんは03年、県内で開催された教育関係者の国際会議に携わった。イスラエルからの参加者に「日本で開かれて

か」と聞かれ、どきりとした。母の証言を映像に残そうと思いついた。

老いた母にビデオカメラを向け、初めて自分から体験を尋ねた。話しぶりにかつての熱意はなく、詳しいことは忘れていた。「遅すぎた」。後悔がこみ上げた。

## 原発重ね 自ら問う

の人生を知らばこそ、放射能への不安に苦しむ人の力になれるのでは。今春、兵庫県内で開かれた避難者の集いにアドバ

イザーとして参加した。夫を福島に残し2人の子を連れて逃げてきた女性(45)が体験を語っていた。事故直後に放射線物質が降り注ぐ中、何も知らされない妊婦や子供が

食料や水を求め、何時間も外に並んだという。誰も守ってくれなかった。自然と親しみ、家族そろって暮らす平和な日々はもう帰ってきません。切々と語る姿が母と重なった。でも女性と違い、

09年、茂子さんは81歳で急逝した。何かをやり残したような感覚に背を押され、翌年、「兵庫県被爆二世の会」を発足。活動方針の一つに「原爆被害者の思いを次世代に伝える」ことを掲げた。

◇

昨年3月の福島第一原発事故後、近畿地方にも避難者が押し寄せた。「親



母茂子さん



授業で原発事故と原爆の被害について話す畑井克彦さん。「苦しんだことは一緒やねん。無関心にならず、我がことと思って」—兵庫県伊丹市の市立伊丹高校で6月27日、長谷川直亮撮影

母の話には「自分」がなかった。まるでドキュメンタリー映画のナレーションのように、悲惨な事実を並べるだけ。そう思いついたとき、記憶の奥底から話の断片がよみがえった。

畑井さんが幼いころから病弱で寝込みがちだった母。被爆地に入った直後からだと言っていた。「畑仕事を休んだら『何サポってる』って親に叱られて、きつかったんよ」。ぼつりぼつりと漏らした思いこそ、一番分かってほしかったことではなかったのか。

この夏。生徒たちの前で原爆と原発、そして母を拒んだ自分のことを話し始めた。週末、久しぶりに母の仏壇を掃除した。「僕に何せえって言うねん」。あの少年の日から何度も、自分に問いかけてきた。母は今の僕をどう思うだろう。

【須田桃子】  
〓つづく